四一　和野の佐々木嘉兵衛、或る年境木越（さかいげごえ）の大谷地（おおやち）へ狩にゆきたり。死助（しすけ）の方より走れる原なり。秋の暮のことにて木の葉は散り尽し山もあらわなり。向（むこ）うの峯より何百とも知れぬ狼此方へ群（む）れて走りくるを見て恐ろしさに堪えず、樹の梢（こずえ）に上（のぼ）りてありしに、その樹の下を夥（おびただ）しき足音して走り過ぎ北の方へ行けり。そのころより遠野郷には狼甚だ少なくなれりとのことなり。

四二　六角牛（ろっこうし）山の麓（ふもと）にオバヤ、板小屋などいうところあり。広き萱山（かややま）なり。村々より苅（か）りに行く。ある年の秋飯豊村（いいでむら）の者ども萱を苅るとて、岩穴の中より狼の子三匹を見出し、その二つを殺し一つを持ち帰りしに、その日より狼の飯豊

衆（いいでし）の馬を襲（おそ）うことやまず。外（ほか）の村々の人馬にはいささかも害をなさず。飯豊衆相談して狼狩をなす。その中には相撲（すもう）を取り平生（へいぜい）力自慢（ちからじまん）の者あり。さて野に出（い）でて見るに、雄（おす）の狼は遠くにおりて来（き）たらず。雌（めす）狼一つ鉄という男に飛びかかりたるを、ワッポロを脱ぎて腕（うで）に巻き、やにわにその狼の口の中に突き込みしに、狼これを噛（か）む。なお強く突き入れながら人を喚（よ）ぶに、誰も誰も怖（おそ）れて近よらず。その間に鉄の腕は狼の腹まで入（はい）り、狼は苦しまぎれに鉄の腕骨を噛（か）み砕（くだ）きたり。狼はその場にて死したれども、鉄も担（かつ）がれて帰り程（ほど）なく死したり。

○ワッポロは上羽織のことなり。

四三　一昨年の『遠野新聞』にもこの記事を載せたり。上郷（かみごう）村の熊という男、友人とともに雪の日に六角牛に狩に行き谷深く入りしに、熊の足跡を見出でたれば、手分（てわけ）してその跡を（もと）め、自分は峯の方を行きしに、とある岩の陰（かげ）より大なる熊此方を見る。矢頃（やごろ）あまりに近かりしかば、銃をすてて熊に抱（かか）えつき雪の上を転（ころ）びて、谷へ下る。連（つれ）の男これを救わんと思えども力及ばず。やがて谷川に落ち入りて、人の熊下（した）になり水に沈みたりしかば、その隙（ひま）に獣の熊を打ち取りぬ。水にも溺（おぼ）れず、爪（つめ）の傷は数ヶ所受けたれども命に障（さわ）ることはなかりき。

四四　六角牛の峯続きにて、橋野（はしの）という村の上なる山に金坑（きんこ

う）あり。この鉱山のために炭を焼きて生計とする者、これも笛の上手（じょうず）にて、ある日昼（ひる）の間（あいだ）小屋（こや）におり、仰向（あおむき）に寝転（ねころ）びて笛を吹きてありしに、小屋の口なる垂菰（たれごも）をかかぐる者あり。驚きて見れば猿の経立（ふったち）なり。恐ろしくて起き直りたれば、おもむろに彼方（かなた）へ走り行きぬ。

○上閉伊郡栗橋村大字橋野。

四五　猿の経立（ふったち）はよく人に似て、女色を好み里の婦人を盗み去ること多し。松脂（まつやに）を毛に塗（ぬ）り砂をその上につけておる故、毛皮（けがわ）は鎧（よろい）のごとく鉄砲の弾（たま）も通（とお）らず。

四六　栃内村の林崎（はやしざき）に住む

何某という男、今は五十に近し。十年あまり前のことなり。六角牛山に鹿を撃ちに行き、オキを吹きたりしに、猿の経立あり、これを真（まこと）の鹿なりと思いしか、地竹（じだけ）を手にて分（わ）けながら、大なる口をあけ嶺の方より下（くだ）り来たれり。胆潰（きもつぶ）れて笛を吹きやめたれば、やがて反（そ）れて谷の方へ走り行きたり。

○オキとは鹿笛のことなり。

四七　この地方にて子供をおどす言葉（ことば）に、六角牛の猿の経立が来るぞということ常の事なり。この山には猿多し。緒（おがせ）の滝（たき）を見に行けば、崖（がけ）の樹の梢（こずえ）にあまたおり、人を見れば遁（に）げながら木の実（み）などを擲（なげう）ちて行くなり。

四八　仙人峠（せんにんとうげ）にもあまた猿おりて行人に戯（たわむ）れ石を打ちつけなどす。

四九　仙人峠は登り十五里降（くだ）り十五里あり。その中ほどに仙人の像を祀りたる堂あり。この堂の壁（かべ）には旅人がこの山中にて遭いたる不思議の出来事を書き識（しる）すこと昔よりの習（ならい）なり。例えば、我は越後の者なるが、何月何日の夜、この山路（やまみち）にて若き女の髪を垂（た）れたるに逢えり。こちらを見てにこと笑いたりという類（たぐい）なり。またこの所にて猿に悪戯（いたずら）をせられたりとか、三人の盗賊に逢えりというようなる事をも記（しる）せり。

○この一里も小道なり。

五○　死助（しすけ）の山にカッコ花あり。

遠野郷にても珍しという花なり。五月閑古鳥（かんこどり）の啼（な）くころ、女や子どもこれを採（と）りに山へ行く。酢（す）の中に漬（つ）けて置けば紫色（むらさきいろ）になる。酸漿（ほおずき）の実（み）のように吹きて遊ぶなり。この花を採ることは若き者の最も大なる遊楽なり。

五一　山にはさまざまの鳥住（す）めど、最も寂（さび）しき声の鳥はオット鳥なり。夏の夜中（よなか）に啼（な）く。浜の大槌（おおづち）より駄賃附（だちんづけ）の者など峠を越え来たれば、遥（はるか）に谷底にてその声を聞くといえり。昔ある長者の娘あり。またある長者の男の子と親（した）しみ、山に行きて遊びしに、男見えずなりたり。夕暮になり夜になるまで探（さが）しあるきしが、これを見つくることをえずして、ついにこの鳥になりたりと

いう。オットーン、オットーンというは夫（おっと）のことなり。末の方かすれてあわれなる鳴声（なきごえ）なり。

五二　馬追鳥（うまおいどり）は時鳥（ほととぎす）に似て少（すこ）し大きく、羽（はね）の色は赤に茶を帯（お）び、肩には馬の綱（つな）のようなる縞（しま）あり。胸のあたりにクツゴコ（口籠）のようなるかたあり。これも或（あ）る長者が家の奉公人、山へ馬を放（はな）しに行き、家に帰らんとするに一匹不足せり。夜通しこれを求めあるきしがついにこの鳥となる。アーホー、アーホーと啼くはこの地方にて野におる馬を追う声なり。年により馬追鳥里（さと）にきて啼くことあるは飢饉（ききん）の前兆なり。深山には常に住みて啼く声を聞くなり。

○クツゴコは馬の口に嵌（は）める網の袋

なり。

五三　郭公（かっこう）と時鳥（ほととぎす）とは昔ありし姉妹（あねいもと）なり。郭公は姉なるがある時芋（いも）を掘りて焼き、そのまわりの堅（かた）きところを自ら食い、中の軟（やわら）かなるところを妹に与えたりしを、妹は姉の食う分（ぶん）は一層旨（うま）かるべしと想いて、庖丁（ほうちょう）にてその姉を殺せしに、たちまちに鳥となり、ガンコ、ガンコと啼きて飛び去りぬ。ガンコは方言にて堅いところということなり。妹さてはよきところをのみおのれにくれしなりけりと思い、悔恨に堪えず、やがてまたこれも鳥になりて庖丁かけたと啼きたりという。遠野にては時鳥のことを庖丁かけと呼ぶ。盛岡（もりおか）辺にては時鳥はどちゃへ飛んでたと啼くという。

○この芋は馬鈴薯（ばれいしょ）のことなり。

五四　閉伊川（へいがわ）の流（なが）れには淵（ふち）多く恐ろしき伝説少なからず。小国川との落合に近きところに、川井（かわい）という村あり。その村の長者の奉公人、ある淵の上なる山にて樹を伐るとて、斧（おの）を水中に取（と）り落（おと）したり。主人の物なれば淵に入りてこれを探（さぐ）りしに、水の底に入るままに物音聞ゆ。これを求めて行くに岩の陰に家あり。奥の方に美しき娘機（はた）を織りていたり。そのハタシに彼の斧は立てかけてありたり。これを返したまわらんという時、振り返りたる女の顔を見れば、二三年前に身まかりたる我が主人の娘なり。斧は返すべければ我がこの所（ところ）にあることを人にいうな。その礼としてはその

方身上（しんしょう）良（よ）くなり、奉公をせずともすむようにして遣（や）らんといいたり。そのためなるか否かは知らず、その後胴引（どうびき）などいう博奕（ばくち）に不思議に勝ち続（つづ）けて金溜（かねたま）り、ほどなく奉公をやめ家に引き込みて中（ちゅう）ぐらいの農民になりたれど、この男は疾（と）くに物忘れして、この娘のいいしことも心づかずしてありしに、或る日同じ淵の辺（ほとり）を過（す）ぎて町へ行くとて、ふと前の事を思い出し、伴（とも）なえる者に以前かかることありきと語りしかば、やがてその噂（うわさ）は近郷に伝わりぬ。その頃より男は家産再び傾（かたむ）き、また昔の主人に奉公して年を経たり。家の主人は何と思いしにや、その淵に何荷（なんが）ともなく熱湯を注（そそ）ぎ入れなどしたりしが、何の効もなかりしとのことなり。

○下閉伊郡川井村大字川井、川井はもちろん川合の義なるべし。

五五　川には川童（かっぱ）多く住めり。猿ヶ石川ことに多し。松崎村の川端（かわばた）の家（うち）にて、二代まで続けて川童の子を孕（はら）みたる者あり。生れし子は斬（き）り刻（きざ）みて一升樽（いっしょうだる）に入れ、土中に埋（うず）めたり。その形（かたち）きわめて醜怪なるものなりき。女の婿（むこ）の里は新張（にいばり）村の何某とて、これも川端の家なり。その主人人（ひと）にその始終（しじゅう）を語れり。かの家の者一同ある日畠（はたけ）に行きて夕方に帰らんとするに、女川の汀（みぎわ）に踞（うずくま）りてにこにこと笑いてあり。次の日は昼（ひる）の休みにまたこの事あり。かくすること日を重ねたりしに、次第にその

女のところへ村の何某という者夜々（よるよる）通（かよ）うという噂（うわさ）立ちたり。始めには婿が浜の方へ駄賃附（だちんづけ）に行きたる留守（るす）をのみ窺（うかが）いたりしが、のちには婿（むこ）と寝（ね）たる夜（よる）さえくるようになれり。川童なるべしという評判だんだん高くなりたれば、一族の者集まりてこれを守れどもなんの甲斐（かい）もなく、婿の母も行きて娘の側（かたわら）に寝（ね）たりしに、深夜にその娘の笑う声を聞きて、さては来てありと知りながら身動きもかなわず、人々いかにともすべきようなかりき。その産はきわめて難産なりしが、或る者のいうには、馬槽（うまふね）に水をたたえその中にて産（う）まば安く産まるべしとのことにて、これを試みたれば果してその通りなりき。その子は手に水掻（みずかき）あり。この娘の母もまたかつ

て川童の子を産みしことありという。二代や三代の因縁にはあらずという者もあり。この家も如法（にょほう）の豪家にて何の某という士族なり。村会議員をしたることもあり。

五六　上郷村の何某の家にても川童らしき物の子を産（う）みたることあり。確（たしか）なる証とてはなけれど、身内（みうち）真赤（まっか）にして口大きく、まことにいやな子なりき。忌（いま）わしければ棄（す）てんとてこれを携えて道ちがえに持ち行き、そこに置きて一間ばかりも離れたりしが、ふと思い直し、惜しきものなり、売りて見せ物にせば金になるべきにとて立ち帰りたるに、早取り隠されて見えざりきという。

○道ちがえは道の二つに別かるるところすなわち追分（おいわけ）なり。

五七　川の岸の砂（すな）の上には川童の足跡（あしあと）というものを見ること決して珍しからず。雨の日の翌日などはことにこの事あり。猿の足と同じく親指（おやゆび）は離れて人間の手の跡（あと）に似たり。長さは三寸に足らず。指先のあとは人ののように明らかには見えずという。

五八　小烏瀬川（こがらせがわ）の姥子淵（おばこふち）の辺に、新屋（しんや）の家（うち）という家（いえ）あり。ある日淵（ふち）へ馬を冷（ひや）しに行き、馬曳（うまひき）の子は外（ほか）へ遊びに行きし間に、川童出でてその馬を引き込まんとし、かえりて馬に引きずられて厩（うまや）の前に来たり、馬槽（うまふね）に覆（おお）われてありき。家のもの馬槽の伏せてあるを怪しみて少しあけて見れば川童の手出でたり。村中のもの集まりて殺さ

んか宥（ゆる）さんかと評議せしが、結局今後（こんご）は村中の馬に悪戯（いたずら）をせぬという堅き約束をさせてこれを放したり。その川童今は村を去りて相沢（あいざわ）の滝の淵に住めりという。

○この話などは類型全国に充満せり。いやしくも川童のおるという国には必ずこの話あり。何の故にか。

五九　外（ほか）の地にては川童の顔は青しというようなれど、遠野の川童は面（つら）の色（いろ）赭（あか）きなり。佐々木氏の曾祖母（そうそぼ）、穉（おさな）かりしころ友だちと庭にて遊びてありしに、三本ばかりある胡桃（くるみ）の木の間より、真赤（まっか）なる顔したる男の子の顔見えたり。これは川童なりしとなり。今もその胡桃大木にてあり。この家の屋敷のめぐりはすべて胡桃の樹なり。

六〇　和野（わの）村の嘉兵衛爺（かへえじい）、雉子小屋（きじごや）に入りて雉子を待ちしに狐（きつね）しばしば出でて雉子を追う。あまり憎（にく）ければこれを撃たんと思い狙（ねら）いたるに、狐は此方を向きて何ともなげなる顔してあり。さて引金（ひきがね）を引きたれども火移（うつ）らず。胸騒（むなさわ）ぎして銃を検せしに、筒口（つつぐち）より手元（てもと）のところまでいつのまにかことごとく土をつめてありたり。